

# 亡き母へ 星槎道都大・滝田投手 プロの夢貫く

最速151キロの速球を武器にプロを目指す星槎道都大の滝田一希投手(村本典之撮影)



後志管内黒松内町出身で、寿都高では部員不足のため連合チームも経験。高校で全道大会出場は果たせなかったが、プロ選手を多く輩出する星槎道都大に進み、頭角を現した。昨年夏に釧路市で行われたオープン戦で、プロ野球

## 速球151キロ左腕 喪失感乗り越え

星槎道都大野球部3年の滝田一希投手(21)が、昨年の母の死を乗り越えてプロ注目の左腕として急浮上している。最速151キロの速球を武器に、プロ相手の練習試合で好投。大学日本代表候補にも初めて選出された。母子家庭で育っただけに一時は悲しみに沈んだが、「どんなにつらいことがあっても、(母を失った)あのつらさを上回ることはない。母さんのために、プロに行くしかない」と決意を固めている。(平田康人)

の福岡ソフトバンクホークス3軍を相手に6回10奪三振、無失点と好投し一躍名を上げた。秋の札幌六大学リーグでは、開幕戦の先発を務めるなどリーグ優勝に貢献。12月には日本代表「侍ジャパ」の大学代表候補強化合宿(松山市)に初めて選ばれ、速球と切れのあるチェンジアップなど変化球を武器に、紅白戦を2回無失点に抑えた。順風満帆に見える1年だったが、昨年5月6日、母

野球をやめようと思った「亡くなる2、3日前、電話で話した。「春のリーグ戦の開幕戦に投げるよ」と伝えると、「けがだけはしないように。無理したら駄目だよ。気楽に頑張るなさい」。それが最後の言葉だった。高校生までは「ちゃんとしなさい」といつもしかられてばかりいた。地元の治療所で「きががら」と対面し、意外なほど穏やかな母の表情を見て、涙が止まらなくなった。それでも、またグラウンドに戻って来た。大学日本代表候補合宿で同年代の選手たちの高いレベルにも触れ、成長への意欲が増した。「日々頑張っていくかないと、お母さんが笑ってくれない。ちゃんと行動して、練習でレベルを上げないと、またしかられそうで怖いです」。亡き母への思いを胸に、プロを本気で目指す1年が始まった。